
けるける

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けるける

【Nコード】
N0579H

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
双葉は子供の頃蛙が鳴くと雨が降るとお母さんに教えてもらった。そしてそれは彼女が大きくなっても。ほのぼのとした現代ファンタジーです。

第一章

けるける

雨が降った今日もだった。

「またあ!？」

上村双葉はうんざりとした顔で上を見上げた。そうして同じくうんざりとした声を出した。

「雨ばかりね。最近」

「そんなこと言ったら駄目よ」

しかしその彼女に隣にいたお母さんが言ってきた。そうしてその小さな手を握り締めた。

「雨だつていいことがあるのよ」

「いいことつて？」

「双葉ちゃんいつもお茶飲んでるわよね」

「うん」

お母さんの言葉に応えてその小さな顔で頷く。頷くとツインテールにしていたその髪が揺れる。彼女はいつもお母さんが作ってくれたお茶を飲んでいるのだ。

「それがどうかしたの？」

「お茶はお水がないと作れないの」

お母さんはこう双葉に話した。

「そのお水はね。こうして雨が降ってもらえるのよ」

「雨はお水なの」

「そうよ」

またお母さんは彼女に話した。話ながら傘をかけその中に彼女をしつかりと入れてもいる。そのうえで娘に対して話すのだった。

「雨がないと。お水はないの」

「そうだったの」

「だから雨はとても大事なもののよ」

「その大事なものがお空から降ってくるのね」

お母さんのその言葉を心の中で反芻する。反芻すると言葉が自然に心の中に刻み込まれてそのうえで確かなものになっていくのだった。

「雨がそうなのね」

「わかったかしら、双葉ちゃんも」

「うん」

さっきまでのうんざりとしたような顔も声もなかった。明るい顔になっている。

「わかったわ。雨ってとても大事なもののなのね」

「そうよ。それに」

お母さんは娘にさらに言う。彼女の手を引いて歩きながら。

「聞いて」

「？何が？」

「ほら、聞こえるでしょ」

雨の中で娘に言ってきた。しとしと降る白銀の雨の中で娘に言葉が続ける。

「歌声が」

「歌声？」

「聞こえる筈よ、ほら」

また言ってきた。お母さんの言葉に従って耳を澄ませると。彼女の耳の中にもその歌声が聞こえてきたのだった。

「けるけるって」

「聞こえるでしょ？」

「うん」

お母さんの言葉にはつきりと応えた。

「聞こえるわ。これって」

「これが蛙の鳴き声なの」

お母さんはまた娘に教えた。

「これがね。わかったわね」

「うん」

お母さんの言葉にまた明るく頷く。

「これが蛙の声なのね」

「蛙はね。雨が大好きなの」

次第に大きくなってくるその歌声の中での言葉だった。

「雨になるといつも聞こえるわよ」

「いつもなのね」

「どう？雨もいいでしょ」

娘にここでも雨のよさを語る。

「わかったら。お家に帰ってね」

「どうするの？」

「ビワ。食べましょう」

「ビワ!？」

双葉はビワと聞いてその顔をさらに明るくさせた。彼女が一番好きな果物だからだ。いつもお母さんと一緒に美味しく食べているのだ。

「ビワ。あるの」

「そうよ。だからね」

「うん、戻ろう」

今にも家に飛んで帰らんばかりになっていた。

「お家に帰って。雨の中で」

「そうよ。大事な中でね」

「蛙さん鳴いて。とても楽しそうね」

子供の頃のやり取りだった。その頃はお母さんもまだ若くて奇麗で彼女もまだ幼かった。それから長い年月が経って双葉は大学生になった。あのツインテールはポニーテールになり小さかった身体は大きくなって胸も足もかなりのものになった。目は大きくはつきりとしていて明るい顔になっている。あの時の小さなスカートは今ではデニムのミニでその下にはいつも黒いスパッツだ。上着は黒いシヤツでかなり活動的な女の子になっていた。

第二章

大学に入っても高校の時の彼氏と同じ大学に通っていた。この彼氏は三木隆盛という。おさまりの悪い茶髪に太い眉の童顔の青年で背は彼女より少し大きい位である。彼女に負けない位明るく活発でいつも大飯を喰らいアルバイトに精を出していた。

「それで昨日よ」

「昨日のバイトはどうだったの？」

「かなり遅くなつてよ」

「こう彼女に語るのだった。」

「もうな。十二時までかかったんだよ」

「また随分遅くかったのね」

「けれどそれだけバイト料は弾むってさ」

「明るい声で彼女に話す。」

「その介があつたつてもんだぜ」

「よかつたじゃない」

「双葉は彼の言葉を聞いて笑顔になった。」

「じゃあ今度のバイト料は」

「かなり期待できるぜ」

「また笑顔で話す。」

「さて、それで何処に行こうかな」

「またあそこ？豚カツ屋の」

「ああ、それいいな」

「彼女の言葉に応えて言う。」

「あそこで腹一杯な。食うつてのものな」

「やれやれ、隆盛は相変わらず食い気ばかりね」

「こうは言うがその大きな目は微笑んでいる。温かい目である。」

「高校の時から」

「何だよ、悪いのかよ」

「別に」

その温かい目のまま述べる。

「悪くはないわ。むしろいい位よ」

「だろ？大食漢なのが俺のいいところさ」

自分で言う隆盛だった。

「だからよ。ここはジャンボカツ丼をどかんな」

「あれだったら今でも食べられるじゃないの？」

「違っんだよ。カツ丼つてのはよ、バイト料が入ったその時にこそよ」

「食べるものだっていうのね」

「そうだよ。だから頼むぜ」

満面の笑顔での言葉だった。

「金が入ったらな。御前も行くだろ？」

「そうね」

双葉もまんざらではない顔だった。

「私も。行こうかしら」

「豚カツ好きな奴に悪い奴はいねえよ」

根拠のない言葉だった。

「だからよ。行こうぜ」

「ええ。それにしても」

話が一段落したところで双葉は少し残念そうな顔になった。そしてその顔で言うのだった。

「最近ね。ちよつとね」

「ちよつと？何なんだよ」

「雨。降らないわね」

こう言うのだった。

「最近。困ったことね」

「ああ、それは仕方ないだろ」

彼はそれは仕方ないと言うのだった。カツ丼の話をする時とは違って変わって冷静な顔になっている。

「それはよ」

「仕方ないって？」

「今何月だと思ってるんだよ」

彼は月日を話に出してきた。

「八月だぜ」

「それはわかってるわよ」

このことを双葉も知らない筈がなかった。

「それはね」

「八月って夕立とか以外には雨降らないからな」

「あと台風ね」

「まあ夕立なんてすぐだしな」

隆盛は夕立についてすぐに駄目出しをした。

「だからよ。雨がないってのもな」

「当然だっというのね」

「降るのは来月からじゃねえのか？」

隆盛はまた言った。

「それまではよ。我慢さ」

「仕方ないっていったら仕方ないけれどね」

双葉も彼の言葉を受けて一旦は頷いた。しかしであった。

「けれどね」

「まあ俺だっって降って欲しいさ」

このうだるような暑さの中では誰もが思うことだった。とりあえず派手に長い間降って欲しかったのだ。夕立位では収まりがつかなくなっていた。

第三章

「けれど今はな」

「どうしてもなのね」

「天気予報でも晴ればっかりだしな」

「ええ」

天気予報は双葉もチェックしていた。これは当然だった。

「それに台風だってな」

「来ないわよね」

「あれは来たら来たらで迷惑だけれどな」

「そうね。災害とか起こるし」

「そういうことだよ。とにかくな」

「雨が降らないのよね」

「来月まで待つしかないさ」

隆盛は空を見上げた。空は高くしかも雨が降るような黒い色の雲もない。そんな気配は何処にもなく見事な真夏日よりであった。

「暑いけれどな」

「やれやれね。……んっ!？」

しかしここでであった。不意に。

「あれっ、これって」

「!？何だよこれ」

隆盛も同じ声を聞いていた。それは。

鳴き声だった。何処か楽しそうに鳴いている。その声は。

「蛙じゃねえか」

「ええ、蛙ね」

双葉はこう隆盛に答えた。

「間違いないわ。これ蛙よ」

「おいおい、何でここで蛙が鳴くんだよ」

隆盛はその鳴き声を聞いてもやれやれといった感じで笑うだけだ

った。

「雨なんか降らないってのによ」

「いえ、降るわ」

しかし双葉は言った。

「降るわ。絶対にね」

「降るっていうのかよ」

「そうよ。降るわ」

双葉はさらに彼に言った。言葉は少しずつ強いものになっていた。

「これはね。絶対にね」

「降るっていうのかよ。マジか？」

「蛙が鳴いてるから」

これが彼女の主張することの根拠だった。

「降らない筈がないわ」

「だといいんだけれどな」

「信じないっていうの？」

「天気予報じゃ晴れだったぜ」

彼が示した根拠はまずは科学的なものであった。

「それも快晴な。降水確率はゼロパーセントだったぜ」

「ゼロなのね」

「しかも今日だけじゃない」

言葉をさらに続ける。

「これから一週間な。ゼロ行進だぜ」

昔の阪神の試合みたいね」

双葉は今の隆盛の言葉を聞いて思わずこんな例えをした。

「ゼロ行進がそれだけ続くと」

「実際にそうだからよ。とにかく降らないってなってるぜ」

天気予報をその根拠として延べ続ける。

「だからな。蛙が鳴いてもな」

「降らないっていうのね」

「空だって見るよ」

次に示したのは現実だった。上を指差すとやはり快晴であった。雲はあっても奇麗な白い雲だ。その雲から雨が降るとはとても思えなかった。

「全然そんな気配ないだろ」

「それはね」

双葉もこのことは隠せない。どうしてもだった。

「私にもちゃんと見えてるわ」

「どうしてこれで降るっていうんだよ」

ここまで話してあらためて問う隆盛だった。

「絶対に降らないさ」

「けれど蛙が」

「じゃあ降ったらな」

隆盛は双葉があまりにも言うので遂に強気に出た。

「賭けるか？」

「賭けるっていつの？」

「俺はあれだ」

彼は言った。

「ハンバーガー食い放題な」

「ハンバーガーなのね」

「ああ、マクドナルドな」

「結構安くない？」

「じゃあ別のにするか？」

双葉の言葉を受けて訂正してきた。

「そうだな。ケーキバイキングな」

「あっ、いいわね」

双葉はこれには顔を晴れやかにさせた。

「それじゃあそれね」

「これから一月好きな時におこってやるよ」

彼はあくまで強気だった。

「まあ降らないに決まってるけれどな」

「じゃあ私は」

双葉もまた賭けに乗る。彼女が出したのは。

「この一月DVDのレンタル料全部出すわ」

「へえ、結構するぜ」

彼の趣味はドラマ鑑賞だ。DVDで観る主義だ。だとするとその費用も馬鹿にはならない。双葉が賭けたのはそれであったのだ。

「じゃあそれでいいんだな」

「いいわ。じゃあ降るか降らないか」

「まあ結果はわかってるけれどな」

隆盛ははじまる前からもう勝ち誇っていた。暑い中でも涼しい顔をしている。

第四章

「DVDか。何を観ようかね」

「けれど蛙が鳴いたわ」

双葉もまだ言う。

「だから絶対に」

「どうかね。まあ来るなら来るで」

勝ち誇った言葉を続ける。

「降って欲しいもんだよ」

こう言ったその矢先であった。

不意に空が黒い雲に覆われていきそうして。瞬く間に雨が降ってきた。しかも大雨であった。

「嘘だろ……」

隆盛は雨の中でまずは呆然となった。

「降るか！？マジで」

「とにかく雨宿りしましょう」

双葉は咄嗟に雨宿りを提案した。

「ここはね。早く」

「あつ、ああ」

我に返って双葉の言葉に応える。

「それじゃあ。どっかに」

「あそこがいいわ」

すぐ側にあったコンビニを指差す。

「あそこに入りましょう。早く」

「だよな。傘だって売ってるしな」

「ええ。だからよ」

そこまで読んでの双葉の提案だった。

「行きましょう。早く」

「わかった。それじゃあな」

こうして二人はコンビニに駆け込んだ。それで何とか雨をかわした。二人がコンビニに飛び込むと雨はさらに激しさを増していた。しかも止む気配もない。

「何だよ、これ」

隆盛は店の中からこの雨を見ながら呟いた。

「まさか本当に降るなんてよ」

「大雨になる直前でよかったわね」

双葉は髪を鞆の中に入れておいていたタオルで拭いていた。そのうえで腕や鞆も拭いていく。そうしながら彼に対して言っていた。

「多少は濡れたけれど多少でよかったわ」

「ああ。それでもな」

隆盛は相変わらずたまりかねたような声で言う。

「降るなんてな」

「驚いた？」

「驚いたっていうか信じられねえよ」

こう答える隆盛だった。

「今さっきまであんなに晴れてたのによ」

「蛙が鳴いたから」

双葉はここでも蛙を話に出す。

「だからなのよ」

「蛙が雨を呼ぶっていうのかよ」

「蛙が雨を呼ぶのか雨が蛙を鳴かせるのか」

それぞれ反している言葉だった。

「そこはわからないけれど」

「それでも降ったな」

「ええ」

どちらにしろこのことは変わらないのだった。雨が降った、この事実だけは絶対であった。

「降ったわ。本当にね」

「全く。一月ケーキだよな」

「御願いな」

今の隆盛の言葉に楽しく微笑む。

「そのことはね。楽しみにしてるわ」

「わかってるさ。約束だからな」

苦笑いと共に彼も頷いた。

「こうなったらな。俺もな」

「一緒に食べるつもりなのね」

「一人で食べるより二人さ」

こう言うのだった。

「それはな。それにしてもな」

「雨ね」

「ああ」

隆盛はまだ窓を見ていた。その向こうでは雨がずっと降っていた。雨の勢いはさらに増し豪雨そのものになっていた。彼はその雨を見続けていたのだ。

「止まないな」

「とりあえず傘買ったなら」

「バス停まで行くか」

「そうしましょう。雨が止むことはないでしょうし」

そのことはわかっていといった言葉だった。

「まずは傘を買って」

「だよな。それにしても」

ふと隆盛の言葉の感じが変わってきた。

「ここでも聞こえるな」

「そうね」

双葉は隆盛の言葉に頷いた。彼女にもその声は聞こえていたのだ。

「蛙の鳴き声がね」

「雨に蛙か」

彼は言った。

「これは絶対に揃うんだな」

「いいことよ」

隆盛に応えながら微笑んでみせてきた。

「雨が降るのはね。蛙が鳴くのも」

「水が降るからだよな」

「そうよ。雨は水だから」

言いながらまだ若かった時の母の言葉を思い出していた。今はもう見る影もなく太って肝っ玉母さんになってしまっている母の言葉を。

「水がないと。何もできないからね」

「それを考えたらこの雨もな」

「いいものでしょ」

「ああ。何かこの蛙の鳴き声が余計に気持ちよく聞こえてきたぜ」
隆盛も笑顔になっていた。双葉とは違ってはつきりとした笑顔だった。

「これからも。この鳴き声聞きたいな」

「そうね。これからもね」

二人で話しながら傘を買ってコンビニを出る二人だった。その二人の耳には今も蛙の鳴き声が聞こえていた。けろけろと鳴く蛙達の鳴き声。

けろけろ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0579h/>

けるける

2010年10月8日15時04分発行